

## ■ 後編

### ■ 岐阜県の印象、岐阜県博物館協会 ■

#### ー 岐阜県に来て、この地にどんな印象を抱きましたか？

関ヶ原の合戦の影響があるんじゃないか。東軍が勝っても西軍が勝っても、荒らされるのは自分たちの土地。住んでいる人たちにとっては、荒らされるだけで、どちらかが勝って良くなるのではない。「どうやっても、変わりませんよ」という、「どうせ」という感覚を、ものすごく感じた。これは今でも感じる。

9.11.ワールド・トレード・センターのテロ（2001年）の後、レクイエムのコンサートの呼びかけが岐阜県美術館にもあった。合唱団が来て、演奏料は無料でいいって言った。学芸部長だった私は、すぐにOKした。そうしたら学芸員がみんな反対した。会場を片付けないといけなし、控室の用意がある、とか言って。しかし、これは世界中でやろうという運動。それで、教育長に言ったら、「そんなことくらい、いいんじゃない」と。つまり「してもしなくても、どちらでもいい」という程度の関心だった。しかし実施したら、本当に良いコーラスだった。そういうものが、どんどん排除されていく。「やってもやらなくても同じなら、やめましょう」となる。忙しくなる、仕事が増える、と理由をつけて。

また、3.11の東日本大震災の時（2013年）、愛知県美術館は翌12日から2ヶ月間だったか、「入場無料にしよう」と呼びかけた。展示も一部、「震災に関わるようなものを並べよう」と。愛知県と三重県の美術館は、やった。私は、宮城県・福島県・岩手県の被災者が岐阜県に来ていたことも知っていた。それで、無料で見てもらうことなどを、岐阜県美術館で提案した。そうしたら、「特別なことはやめましょう」「通常の開館でよいのではないか」と。結局できなかった。職員はそのため、報道もしなければいけない、館内掲示もしないといけなし、入口を有料・無料に分けなければいけない、そういうことを理由に挙げて、結局何もしなかった。でも、愛知県は「祈り」のテーマで展示替えをした。三重県は、宮城県で修復関連の仕事をしていた関係もあった。

やってみたら絶対に面白いことでも、昨日と今日で同じことしかしたくないという、役人根性のようなものは、全国共通だと思う。しかし、岐阜県には、「どうせ、変わらない」という感覚がある。私は結構、知り合いを家に呼ぶけれど、岐阜県人は呼ぶことをしないね。

（岡田：若い頃に、郷土作家の展覧会で、県内の様々なところに調査で入り込んだ時、「岐阜の土地柄は、潜水艦の潜望鏡のようなもんだ」と言われた。みんな水面下に潜っていて、水の上に潜望鏡を出して、きょろきょろと周りを見る。メリットがないと、潜望鏡を引っ込めてしまう、と。）

慎重に物事を考えるという意味では、いいんだけど。自分の知らないこと、経験してないことを、あまり考えたくないんだ。

#### ー 岐阜県博物館協会の活動について、関わったことを教えてください。

岐阜県博物館協会が創立40周年の時に、自治体の出資金が削減されたので、企業から協賛金をもらおうということになった。西濃運輸と、十六銀行・大垣共立銀行・岐阜信用金庫に、当時、協会の会長だった若宮さんと一緒に行った。西濃運輸で社長の田口さんに会い、若宮さんが大垣市の田口町とい

う、田口家ゆかりの土地に住んでいたことを話したら、「それなら、出資せざるを得ないね」と。そういうレベルで人や組織は動く。500万円も出してくれた。十六銀行と大垣共立銀行が200万円ずつ、岐阜信用金庫が100万円。それで一千万円になった。

私は「この資金で何か大きいことを、数年かけてできるのでは」と思い、協会の会議にかけた。また、各施設に「至急やりたいことを出してほしい」と伝えた。ところが会議で、県庁から来た役人気質の人が、「それは良くない」と言った。「協会会員70館が平等に使うべきだ」と。一千万円を70で割ったら、各々に配分される金額は少額になってしまう。しかもその人は「一度に使ってはいけない。継続していくことが必要だ」と。みんなそれに賛成してしまった。

私は「この機会だからこそ出来ることをやるべきだ」と、ずいぶん力説した。「どこかの施設が、今まで資金難で出来なかったことを、出来るチャンスだから、意見を出してほしい」と。でも、どこからも意見が出てこなかった。結局、各美術館・博物館の案内板を3カ国語に訳すことになった。併せてそのための備品購入で、半分以上使ってしまった。それから各館のホームページを立ち上げる事業に使った。このように「みんな平等」にした。それで資金が無くなってしまった。

私は、或る博物館に「派遣調査などしたらどうか」と提案の電話をした。すると「全職員が仕事で一杯なので、誰かに休まれたら困る」と。「職員じゃなくてもいいから」と言ったけど、ダメだった。岐阜県美術館とか公立の大きな所でなく、小さな館が活用してほしいと思って、いくつも電話した。でも、どこも余計な仕事をしたくないんだ。

また、例えば本巢には、奈良国立博物館に寄託している、国宝の掛軸五幅がある。それで、国内留学として、徹底的にその作品を研究する事業に、資金の使い道があると考えた。このような活動をする、企業の協賛金が次に続くから。見える形での成果がないと、次の年に繋がらなくなる。実際の所、協賛金は減って行って、数年前に最低額になった。

今も協賛金の分け方が、地域ブロック部会ごとなど、あまりにも平等の扱いだ。仮に資金をどこか一つに絞って事業をやったなら、成果が目に見えて、企業も資金をくれるだろう。そうしないと、協賛金を何に使っているのか分からなくなる。東京とかだったら、企業が理解できる事業計画を出せば、協賛金はすぐ決まる。岐阜県人は、外からくるハッピーな物事に、ノーと言ってしまふ気質がある。特異になる、特質を作る、ということが苦手と言える。目立ちたくないし、目立ったら、どう叩かれるか、とか考えてしまう。

## ■ これからの学芸員と美術館 ■

### ー 今と今後、学芸員に求められることは何だと考えますか？

学芸員については、専門分野について、変わる可能性を自覚すべきだと思う。学んできた分野以外で、本当にやりたいことが見つかるかもしれない。また、突然外からやってくる要因がきっかけになって、やりたいことが生まれる場合もある。これまで出来ていたことが、例えば自然災害や事故で出来なくなると、やらなければいけないことが、むしろはっきりしてくることもある。だから「本当にやりたいことは何なのか」と、いつも真剣に、かつ積極的に考えることが重要。また、「やりたいことの発見には、自身の努力などではなく、予期せぬ外的要因がきっかけになりうる」と、自覚することが大切。

先程も言ったが（中編、館長になって…の節）、「curator」の語源にあたる「cure」には、「塩漬けに

して保存する」という意味がある。学芸員は、モノ自体を保存することはもちろんだけど、まだ知られていないモノの価値を保存することも、重要な仕事。「価値を見出してこなかったモノや、予期せぬ外的要因でも、自身にとって新しいステップだ」と思える学芸員が望まれる。とはいえ、専門外の新しいことにまで関わると、当然忙しくなって、新しいことに消極的になりがちだ。しかしどこかの瞬間で、「考えてもいなかったが、やってみよう」と思える、きっかけをつかむことこそが大切だと思う。

例えば、岐阜県知事のトップダウンで、ニューヨークでの織部展が企画された際に、当初は、館に桃山時代の陶磁器の専門家がいないため、私たちは開催に反対した。しかし、竹内順一氏（五島美術館 学芸部長）をゲスト・キュレーターとして招くことにした。竹内さんには約2年間、展覧会の準備に携わっていただいた。私は竹内さんとの仕事を通じて、「日本には、こんなに面白い美術が、桃山期にあったのか」と驚いた。この事業は半ば知事部局に押し切られる形だったが、もし反対したままだったら、桃山期の美術の素晴らしさに驚き、それを見直すこともなかった。



#### — これからの博物館には、どんなことが大事だと思いますか？

岐阜県博物館協会では、毎年、加盟館みんなで、一つの館を持ち上げるような活動を、企画することが必要だと思う。そのために全員が、力量も知恵もお金も集中させる。それだけで、一つの館が立派に自立できる施設に成長する。なぜなら、大きな事業をみんなで協力して作り上げるなら、変なことはできない。そのために必要な協賛金の確保は、協会幹部がすればいい。協会会長を先頭に、協会が主体となって、各部会を統括して、事業を実施する。

一つの加盟館の取り組みに注目して、それを協会全体の規模でやったらどうか、という案が出てきたら、協会会長から加盟館へ呼びかけてはどうか。学芸員を派遣することは難しくても、応援程度なら可能という館があるかもしれない。国宝や重要文化財を展示または借用できるだけの、機能が備わっていない展示室があるなら、協会が大規模改修を実施してはどうか。

反対意見も出るだろうが、それを恐れずに提案するといい。加盟館が一丸となって取り組めば、次年度以降も継続できるだろう。会長の呼びかけは、協会の力を結集することに効果がある。このような取り組みは、どこの都道府県でもできると思うけれど、まだ実例がない。ぜひ岐阜県の博物館協会で行ってほしい。このような取り組みは企業も期待している。企業にとっては、広告の類いだけでなく、知的な文化芸術活動を支援することは、イメージアップにつながるから。

私は岐阜県博物館協会や加盟館が無力だとは思っていないし、優秀な人材は沢山いる。しかし、繰り返すが、協会内で「平等」や「一律」という考えを意識しすぎではないか。例えば地域ブロック部会に関して、特定の地域ブロックに、5地域分まとめて充ててはどうか。その資金を受け取る地域ブロック側も、真剣に活動を見直すはずだ。そういう外的要因がきっかけとなって、より良い展示や、その他の活動につながるかもしれない。

中津川市出身の洋画家、熊谷守一は、関東大震災の時に東京に住んでいて、震災当日の日記に「大地震 トンボユウクリ 飛ンデイル……」と記している。人間には、最悪の環境下で、突然、物事の

本質を見てしまう瞬間が訪れる。博物館でも、計算しつくされた環境が良いとは限らない。今にも無くなりそうな小規模館に、大きな企画を持ち込むといった、不意に訪れる環境変化を与えてみてはどうか。何か本質を捉えて、良い活動に結びつき、博物館が息を吹き返すかもしれない。

— 古川さん、本日はありがとうございました。